

「お父さん。結局、外国人参政権って何？」

街宣が終わったあとの朔川家の居間。久方ぶりに家族内の垣根の無くなったここで、奏は父にそんな事を尋ねた。

彼女にとっては当然の質問だったのだが、父である公平は娘の言葉に半ば唾然とし、もう半分で呆然としていた。

「何だ。お前、今頃そんな事言ってるのか」

いったい何のために反対してたんだ、と言外に言いながら父は本日生まれ変わった（と認識している）娘の顔をじつとみた。

多分に母の血が色濃く反映されている娘の顔が、彼の前の前ですぐさましかめられた。

「……お前はいったい何に反対してたんだ」

「うーくん、お父さんが反対反対うるさいから、そうかな、と思った：だけかな」

その言葉に公平は大きく長いため息を吐いた。

「情けない。お前はお父さんの言う事をだな……」

「ちゃんと聞きます。だから何でお父さんは騒いでるの？」

毎度のように始まりかけた長い長〜い説教を上手く阻止して、奏は要点について質問した。

そんな娘の行動に一瞬ムカツとした公平であるが、優先するべき事はそのじやないと気付いて話の本題に入っていく。

「それは国民の義務や権利というのを知らないといけないな」

「権利と義務？」

「そうだ。」

『やらなきやいけないこと』と『その代わりにもらえるもの』と言った方がいいかな」

「ああ、なるほど」

言われて奏も理解した。

ケンリやギムと言われても何のことだか分からないが、そう言い換えてくれると分かり易い。

「で、この『やらなきやいけないこと』と『代わりにもらえるもの』の二つだが。」

お前は分かるか？」

「えーっと、社会の授業でやったやつかな？」

「うん、たぶんそれだ」

「確か、『キョーイク』と『キンロー』と『ノーゼイ』だったかな」

「まあ、確かにそうだな」

娘がそれらをカタカナ語で言ってるのに少しばかり不安をおぼえるが、それを追求してたら時間がかかる。公平はあえてそこは聞き流すこととして話を進めることにした。

「それで権利の方は？」

「えーと……………。何だったっけ？」

「……………」

「……………」

居間に気まずい沈黙が訪れた。

その沈黙を公平は溜息で打ち破り、今ひとつ勉強に身を入れてない娘に教えを垂れ始めた。

「生存と教育と参政権だ」

「え？」

「つまり、『生きていく為の環境を守る事』と、『必要な知識を教わること』、それと『国の行き先を決める政治に参加する権利』の三つだ」

「ああ、なるほど」

「まったく、お前は学校で何を勉強してたんだ」

こんな事当然だろうにと思いつながら頭を抱える公平。

だが、それもすぐに終わる。

「だって、そんなの習ってないもん」

「なに?!」

「納税とか勤労とかは確か言ってたと思うけど、権利…………で良かったんだっけ？ その権利については何も聞いてないよ」

「なんだって!!」

娘の言葉に公平は大声を上げた。

「学校でもちよつと触っただけで、内容までは教えてもらってないかな」

その言葉に思い当たる事があったのか。呆れた顔をしていた公平はすぐに真剣な表情になる。

「まさか日教組か？」

「え、なにそれ？」

「ああ、いや。日本にある問題の一つだ。

それはまた後で話すとして。

奏、お前は権利とか義務について何もならってないのか？」

「そうだなー……。習ったところと習ってないところで色々かな。教科書には載ってたけどあんまりやらなかったところとか、教科書に載って無くてもプリント渡されてしつかりやったところとか」

「そうか……」

公平の顔が更にこわばっていく。その様子に奏も何かまずい事でもあるのかと思っていく。

「分かった。それについてはまた今度話そう。」

とりあえずは外国人参政権だ」

「う、うん」

その父の言葉に奏も頷く。おそらく父は更に大きな問題を知ってるのだろう。それが何であるのか気にはなったが、まずは外国人参政権の方が先だ。

「さっき言った『政治に参加する権利』は分かるな」

「うん、選挙に行くのと、立候補することだよな」

「ああ、そういう事だ。それはさすがに教えていたんだな」

「うん」

何となく父の言い方に違和感を感じる。いつもだったら「何を教わってきたんだ」と奏を責めるものだが、今回は「教えていた」と教師の方を責めている。

その理由を問う間もなく父は言葉を続けていく。

「その権利の一つである参政権を、外国人に渡してしまおうとしている。」

それが外国人参政権の問題だ。

この権利と同時に背負うはずの義務は、何一つ背負うことなくな」

「げっ」

さすがにそれは問題だろう。問題の一端を理解し、奏は露骨に顔をしかめた。

「それって最悪じゃない」

「最悪だ」

公平は何一つ否定しない。

「まともに働かない、税金すらも納めない、教育以前の躰すらもしない。それでも権利をあげようって言うんだからどうしようもない」

「うわぁ……………」

頭がクラクラしてきた。

「そしてこの事については憲法にすらちゃんと書いてある。

第十五条だが、『公務員を選定し、及びこれを罷免することは、国民固有の権利である』とある。これが参政権の根拠だ。国民の権利であつて他の国の人間の権利ではない。

にも関わらず外国人に国民の権利をあげようとしてる。

馬鹿げた話だ」

まったくその通りだ。いくら何でもそれは横暴すぎるだろう。

「何を考えてるの、外国人参政権を与えようって人達は」

「分からん。ただ、日本の事などどうでもいいとは思ってるんだろうけどな」

「はぁ……………」

呆れて言葉も出ない。

「おまけにこの外国人参政権についての根拠なんだが、裁判の傍論だけが根拠だ」

「ボウロンってなに？」

初耳だ。

公平はメモ帳とボールペンを取り出して書いて見せた。

「傍らの論と書いて『傍論』だ。裁判官の参考意見とか、独り言みたいなもんだな。

法律としての拘束力はない。言ってみれば付け足してみたいなもんだ。

けどな、これを外国人参政権の根拠にしようとしてる連中が大勢いる」

「……………」

「この傍論を付け足したのが園部逸夫という男だ。

『地方公共団体の長や議員の選挙で、定住外国人に選挙権を与えることは憲法上禁止されていない。地方自治の本旨から見てまったく憲法違反だとは言いい切れない』とな」

「え？ ちよ……………」

判決で『外国人に参政権を上げるのは憲法違反です』って言って突っぱねて、付け足しのボウロンの方じゃ『定住外国人に地方参政権上げるのは禁止されて無い』って言ったってコト？

え？え？」

頭が混乱してきた。

判決結果と傍論では言ってる事がまるつきり反対だ。  
なんでこんな事を裁判官が書くのか分からない。

「そう言う事だ。おかしな話だろう。」

実際、これをきっかけに、『まずは地方参政権を外国人に与えよう』  
と言う動きが『根拠』を得て現在に繋がる訳だな」

頭がどうにかなりそうだった。

裁判官が、法律を司る者がこんな事をしていいのか、と思う。

「ま、詳しい事はネットとかでも調べて見ろ」

そういつて公平は居間のテーブルに置いていた自分用のノートパソコンをポンポンと叩いた。

（外国人参政権 Wikipedia:

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%96%E5%9B%BD%E4%BA%BA%E5%8F%82%E6%94%BF%E6%A8%A9>)

「うん、あとで調べてみる。」

でも、本当にそんなのを理由にして外国人に参政権をあげようって言うてるの？」

「一応他にも理由はある」

「まだあるの!!!」

「ああ。」

憲法学者の長尾一紘というのが『部分的許容説』というのを基にして  
外国人参政権に賛成していた」

足下がふらふらしてきた。

裁判官に続いて学者が？」

信じられなかった。そんな偉い人がどうしてこんな馬鹿な事を言うのか不思議でしようがない。

（中学生の私だっておかしいと思うのに）

呆然としてる娘を見て公平はあわれに思えてきた。彼自身もこういった事を知った時には足下が崩れるような感覚をおぼえた。いったい何を信じていいのか分からなくなつて。

だが、それでも公平は話を続ける。

「だが、この二人も最近になって話を翻し始めた。

園部は、『(在日韓国・朝鮮人を) なだめる意味があった。政治的配慮があった』と言ってる。

長尾は『鳩山内閣になり、外国人地方参政権付与に妙な動きが出てき

たのがきつかけだ』と言ってる。

何にせよ、それまで出ていた意見を覆したのは確かだ」

「最っ低ー」

見下したような蔑みの声を奏は口に作る。

「まったくくだな」

公平も娘の率直な言葉に頷いた。

本当に最低だ。

政治的配慮で傍論を付け足した裁判官も、つまらない学説で国を傾けた学者も最低としか言いようがない。

挙げ句に今の今まで意見を変えずにいたのだから。

問題が現実味を帯びてきた段階でようやく意見を覆す。それは我が身の保身を考えるのか。あるいは、ここまで来れば何をしても目的達成できるから、意見を変えてもいいと思ったのか。

どちらにせよ、自分が可愛くて動いてる輩のように思えてならない。人間として、そして男として最低だと思う。

また、間違い・問題があると知りつつ今の今まで黙っていたのはどういふつもりなのだろうか。

そんな不実で誠意のない態度の人間が責任ある立場にいても良いのかと。

自身も小なりと言えども仕事の一端を任せられ、責任を負う立場にいる公平には理解できない事であった。

「あとで覆すような浅い考えで外国人参政権に賛成していたんだから、情けないっいたらありやしない」

「でもさ」

「ん？」

「外国人参政権ってそんなに問題なの？」

もし外国人に参政権をあげたらどうなっちゃうの？」

聞くのもどうかと思っただが、奏はあえて尋ねた。

この問題についてそれが最大の疑問だった。

外国人参政権。それを認めたらどうなってしまうのかと。

公平のことだからすぐにムキになって「バカモン！！！！」と叫ぶだろうとは思っただが。

意に反して公平は静かに奏を見つめていた。

ただ、顔はこれまでになく真剣であったが。

「お父さん？」

「……………」

沈黙しながらも自分に目を向けたままの父に、これまでにない迫力を感じる。決して怖いというわけではないが、自然と背筋が伸びていく。そうさせるのが威厳であったとあとあと気付くが、このときの奏はそんな言葉自体知らずにいた。

「外国人参政権については、外国の動きを見た方が早いな」

「外国？」

「そうだ。」

実は外国人参政権については既に前例がある。

その結果どうなったのかを知った方が早い」

そういつて公平はノートパソコンの電源を入れた。

それから暫く色々と操作をしていたが、一段落ついたのかキーボードから手を離して奏の方に向ける。

「ここに父さんの集めた資料が入ってる。俺が口で説明するより、自分で見た方が早いだろう」

言われて奏はパソコンに目を向けた。画面にはフォルダが展開されており、そこにはドキュメントファイルやらPDFなどが入っている。

面倒だなと思いつながらも奏は、パソコンにつながったマウスに手を伸ばしてその一つを展開した。

再び奏が画面から目を上げたとき、時計の針は三時間ほど進んでいた。

こわばり青ざめた娘の顔を見て、公平は重く口を開いた。

「分かったか？」

「……………」

父の言いたい事がよく分かった。文字通り「嫌」という程。

フォルダに入っていたのは、ネットで集めたであろう様々な情報の集合体だった。

そこにはヨーロッパ各国における移民・外国人参政権についての情報が数多くあった。

移民としてやってきた外国人は、やがて権利を要求し、権利を得たら国政を動かすはじめて自分達の有利な風に展開していく。それに危惧を

抱いた現地人との対立が発生し、国は内乱状態に陥る。

悲惨なところになると国を乗っ取られて外国人に支配されてるところすらある。

漫画や小説、映画やアニメの話ではない。全て実在の国や地域で起こっていることだった。

「そこにも書いてあるが、」

いつもより重い口調で公平が口を開いた。

「ヨーロッパで地方参政権を与えた国は、地方が乗っ取られた。おかげで元々そこにいた現地人の方が迫害されてしまっている。

また、人口の少ない国や地域などは、押し寄せる移民に文字通り乗っ取られる。現地人の方が少数派においやられ、多数派の外国人がその地域を支配する。

これがヨーロッパの現実だ」

「……………」

「仮に参政権を与えなくても、移民を許した時点で混乱と騒動の原因になる。

権利を求めてのデモ行進や暴動は発生するし、それを押しとどめる警察や現地人も移民より数が少なければ簡単に押し切られる。

皮肉なことに、人権を大切に行っている国ほど、そうした移民の人権すら大事にしてしまうから、暴動を抑制できなくなる」

本末転倒だ。いったい誰のための人権なのか。

奏の頭は既に混乱直前だった

「だが、それでもまだ国が乗っ取られてないからいい。

チベットやウイグルと呼ばれている東トルキスタン、それに内モンゴルに満洲という国や地域は、既に中国に乗っ取られている。

歴史を遡れば、ハワイがこれだ。

アメリカから大量の移民が押し寄せ、選挙を要求。ハワイ人より人口が多くなった白人が当然ながら選挙に勝利。元々住んでいたハワイ人を隅に追いやり主導権を握った。

そしてハワイ王国はアメリカに侵略された」

それもフォルダの中の情報に入っていた。

アメリカは自由と人権を大事にする国だと思っていたが、その考えが根底から崩された気がする。

「外国人参政権だけが問題じゃないが、これが最後の防波堤とも言える。



もしこんなのを認めたら、日本は確実に崩壊する。

俺や他の人が外国人参政権に反対するのも、こういう事を知ってるからだ」

そりゃそうだろう。

こんな事になると分かっていたら絶対に誰もが反対する。

「外国人参政権ってこんなに危険なんだ……」

「ああ。もし認めたら明日にでも国が、少なくとも地方が乗っ取られる」

「え？ 嘘……」

「本当だ。少なくとも地方の市町村ならば市長や議会が全員外国人という事にもなる」

「……！！」

こんなに驚くのは今日何度目だろう。そう思いつつも奏は父の話に耳を傾ける。

「俺達が問題にしている在日問題。いわゆる日本に在住している韓国人や朝鮮人だが。

こいつらが日本に一五〇万人。実際にはもつといるかもしれない。

これがどれだけの人数か分かるか？」

「ちよっとピンとこないかな」

「分かり易く言うと、首都圏の市町村。これがだいたい数十万人くらいだ。一つの市と同じかそれ以上の人数がいるという事になる」

その数が何を意味するのか一瞬で分かった。

もしそれだけの人間が一カ所に集まったら、市町村は確実に乗っ取られる。

「これはあくまで首都圏だけの話だ。

地方ならば数万人、下手したら数千人という自治体だってある。そんなところなら幾つもの市町村が乗っ取られるだろう」

「そんな……」

「それに市町村だけじゃない。地方の県だったら人口の少ないところもある。もし外国人参政権が国政にまでひろがれば、地方選出の外国人国会議員が出てくる事かもしれない。

そうなれば国政への口出しだって可能になる」

そこまで聞いて奏はぞっとした。

先程みた父のパソコンに書いてあった事が一気に現実味を帯びてきた。

移民、流入、暴動、乗っ取り。  
日本占領。

創作でもなんでもない、まごう事なき現実としてそれらが目の前に迫ってきたようだ。

「それに外国人の流入は今も続いている。

在日外国人では、昔からいる韓国・朝鮮だけでなくシナ人なども増えてきている。もうシナの方が在日韓国人や朝鮮人より多いとも言われている」

奏の頭にチベットという単語が浮かんだ。ウイグルというのも。

父が中国をシナと呼ぶのはもう知っている。そのシナがこの二つの国に何をしたのか、今も何をしてるのか。今さっき見た数々の情報が教えてくれる。

弾圧、虐殺、圧政。

そんな事をしてる連中が日本で参政権を握ったらどうなるのか。

比喩でも何でもなく背筋が凍えた。こんな時に人は、本当に震えるのだとも知った。

「それにシナの人口は日本の一〇倍以上だ。数百万人・数千万人という人間を日本に送り込む事なんて造作もない。

まして連中は指令一つで日本国内にいるシナ人をすぐに集める事ができる。

長野オリンピックの時にそれが証明された」

「ああ、あれね」

その時の事は奏もおぼえている。今よりまだ子供だったが、テレビにうつったその時の長野の様子ははっきりとおぼえている。聖火リレーの沿道にならぶ大小の赤い旗。あれが中国の国旗だとはその時分からなかったが、当時は熱心な人がいるもんだなと思っていた。

今となってはただただ怖いだけだ。

「あれでも数千人数度の規模で集まったにすぎない。だが、あれだけの人間があれだけの旗を用意して集まる事ができる。それだけ連中は組織化されているという事だ」

「そうなの？」

「ああ。たとえばあの旗。あれだけの数や種類を用意するのにどれだけの金と時間がかかると思う？ 事前に準備しなければあんなの集められない。

それに数千人の人間を全国から集めるために、どれだけのバスや車、電車が要になると思う。集合場所なんかも事前に決めておかないとやらないし、それを報せる人間も必要だ。現場で連絡を取り合う手段もな。それだけのものをシナ人は用意していた。」

「なるほど」

確かに凄いなと思う。でも、そんなにたいそうなものなのだろうかとも思う。

娘の反応から何かを察した公平は、少し考えた。もう少し分かり易く説明しないと事の重大さを伝えられない。

「そうだな。」

たとえば学芸会でもなんでもいいが、クラスで何か出し物をやったときの事を思い出せ。

「お前達のクラスはうまくまとまったか？」

「うーん、どうだっただろ。やる人はやるけど、やらない奴は何言ってもやらなかったかな」

「何十人かのクラスでもそうなんだな。なかなか上手くまとまらない。」

じゃあ、同じ学年の人間を一つに纏めるというのはどうだ。上手くできるか？」

「それは、ちよつと難しいかな」

「そうだろうな。じゃあ、更に拡大して学校全体。何百人と人間がいるわけだが、これを一つにまとめる事はできるか？ お前の思うように動かせると思うか？」

「いや、それはちよつと……」

「そうだろうな。」

数百人、学校一つ分の人数を動かすのすら難しい。

シナ人はその十倍、数千人の人間をあれだけ動かした。お前に出来るか？」

「あ、ああ、そっか。それは無理だね」

「その無理な事を奴らはやってのけたんだ。これは凄い事だぞ」

「なるほど、そういう事か」

ようやく納得できた。確かにそれは凄い事だ。

どうやれば数千人という人間を集めることができるのか見当もつかない。い。

「俺達だつてようやく数十人つて人が集まるようになったばかりだから、

あのすごさがよく分かるよ」

落ち込み気味な公平の声に奏もつられる。シナ人が何人いるか分からないが、日本は一億人以上いるはずだ。その中で集まるのが数十人というのはどういう事なんだろうか。

日本の、自分達の未来に関わる事なのに。

そこまで考えて奏はハツとした。

自分の未来に関わる事なのに何も知らなかった、行動している父に反発していたのは自分だったのではないかと、と。

同じ家族、生まれた頃からずっといるにも関わらず、何も知らずにいた。これが他人ならばどれだけの差があるのか。

日本における絶望的な状況の一端が確かにここにあった。

家族ですらこんな状況なのだ。赤の他人だったらどれだけ無関心なのか想像するのも恐ろしい。

「話が逸れたな」

考え込む奏をよそに公平は話の流れを元に戻す。

「外国人参政権が国をどれだけおかしくするかは今話した通りだ。これは軍隊や戦争とは違う侵略だ。それを認めるわけにはいかん。

だから俺達は出来る事をやってる。

チベットやウイグル、ハワイ。それにヨーロッパのようにしないためにな」

奏はようやく父が言っていた事の意味を、サイトで述べていた意味を理解した。

日本のため、子供達のため。

それは紛れもなく真実なのだ。

もしここでそれを認めたら、日本と子供達がどうなってしまうのか。

現実はこの世で起こってる事を基にして父は考え、そして今の行動をしている。

それは父だけではない。同じような危機感を抱いた他の人達もそうなのだろう。

彼らは他の誰でもない。自分達のために、そして同じ日本に住む者達のために、何より日本の未来のために行動しているのだ。

(そっか)

あらためて父が何をしているのかがよく分かった。

何に反対しているのかも。反対しているものの正体についても。

「ま、お前も調べてみる。世の中にはおかしなものがいっぱいあるぞ。夫婦別姓に児童ポルノ法案、人権擁護法案、改悪国籍法、皇統断絶、あとはそうだな……。」

外国人参政権と同じような内容の外国人住民基本法ってのもある」

「ちよ、まつ……」

「他にも色々あるが、とりあえずそんなもんだ」

「大丈夫なの日本……」

思わず叫び声をあげる。

こんなのが控えてるとは、本当に日本は大丈夫なのだろうか。

奏は先程より大きな寒さを背筋に感じて身震いした。